療育とアートの混ざり合い

～多様なコミュニケーションの形～

平成30年度事業まとめ

浜松市根洗学園
（社会福祉法人ひかりの園）

2018
SHIZUOKA

アーティスト・イン・レジデンス

今年のアーティスト・イン・レジデンスのねらいと、プロジェクト進行

演劇家の柏木陽さんを学園に迎え入れ滞在制作を実施。療育現場にある人の動きや関係性、業務やルールなどを演劇の目で読み解き、映像作品をつくりだしました。外部の視点によって現場のあり方が作品化されることで、演劇的視点と療育現場の共感できる点を探る試みです。

プロジェクトをスタートする前に企画の意図や現場の思い、アーティストがこれまでやってきたことを互いに共有しながら、滞在スケジュールや進行プランを計画。その後のべ 7 日間ほどインターンの形でアーティストに現場を体験してもらいました。そこで見聞きしたことなどを元に作品プランをつくり、現場と調整しながらの制作スケジュールを立て、映像作家の樋口勇輝さんを加えての進行となりました。

感想・気付き

アーティストが切り開く、一見遠回りのような道

アーティストが長期にわたって居続けることで、それまでは距離をとっていた人物と職員たちの間にかかわりが生まれます。何気ない話や、日々の確認から始まり、次第に子どもとのかかわり方まで話題が広がっていく中で信頼関係が築かれていきました。一方、子どもたちは、見学者ではなく、現場にいる人として感覚で見抜き、す〜っと仲間に入れてしまいます。大人と子どもたちのこの距離の縮め方の違いは何か？と考えさせられました。大人は自分と違う部分より共通の部分を探し、その分量がある程度満たされると関係性が動き始めるようです。

アーティストは学園の日常である療育･生活の舞台に乗って、さりげなく仕掛け、違和感なく関係性に変化を生んでいました。普段、自分の中で留めてしまう現場職員の自由な声が、日常の会話の中で漏れ出し、アーティストがキャッチし、現場職員とさらにやり取りしながら形にしていく。そんなプロセスを経て形作られたものが、自分たちのやっている療育の一部分や、知ってもらいたいことを雄弁に表現していました。

スタートする時はぼんやりしていましたが、滞在するアーティストとの現場づくりは一見遠回りのようだが、現場らしさがより際立つ場づくりにつなげる突破口となるという気づきがありました。そこには映像というアウトプットの効果も大きかったと感じます。

アーティストが療育現場にいる意味の大きさ

「アーティストは第三者である」そのことの意味は大きかったと思います。上下ではなく、横並びでもない関係性。現場にはない空気感を持ちながら、現場に滞在しているから共有できるエピソードが増え、職員とは違う視点からの話・やり取りが生まれます。

歴史が長ければ長いほど、現場には暗黙の了解があるように思う。「ここではこうしなければ」の見えないルールがつくられ、それが文化となり、無意識にそれを守るように行動してしまいます。「これは本当に意味があるのだろうか？」「本当に必要なことなのだろうか？」という問いを、自分たちに向けることがなくなってしまいます。

多くの業務とともに人材難を抱える中で、「現場は動いているが、止まっているものがあると感じる違和感」があります。それは現場の苦しさにもつながっています。アーティストが入り、問いが交わされ、「それいいじゃん！」の声が聞かれ、現場の視点とちがった解釈も聞かれる。普段にはない関係性から見えてくること、気づかされることによって、その止まった部分に動きが感じられます。

自分たちのやっていることを再確認し、あらためて考え始め、変わっていける可能性を感じる。そんな動きを生み出すその意味はとても大きい。

柏木 陽　かしわぎ・あきら

劇作家・演出家の如月小春とともに活動し、アジア女性演劇会議事務局、兵庫県立こどもの館の野外移動劇ワークショップなど新たな演劇の可能性を探る現場に関わる。03 年、特定非営利活動法人演劇百貨店を設立し、代表理事に就任。現在もワークショップの進行役として、全国各地の劇場・児童館・美術館・学校で、子どもたちと独自の演劇空間を作り出している。青山学院女子短期大学、大月短期大学、和光大学で非常勤講師を務める。平成 29 年度「演劇教育賞」(日本演劇教育連盟) を受賞。

経 歴（近年の仕事）

世田谷パブリックシアター契約ファシリテーター、
熊本県立劇場アウトリーチプログラム、
えずこホールアウトリーチプロジェクト、
世田谷パブリックシアター地域の物語ファシリテーター

実施スケジュール

- **7月5日**・・・・事前打ち合わせ１回目
- **8月21日**・・・事前打ち合わせ２回目
- **10月12日～12月27日**・・・滞在
  10月12日、19日 / 11月14日、15日 /
  12月25日、26日、27日
- **1月8日～3月6日**・・・・・・・制作
  1月8日、17日、18日、30日、31日 /
  2月1日、8日、14日、15日、21日、22日 / 3月6日
- **3月20日**・・・・試写会

AiR

作品紹介

根洗学園に滞在していると、この学園の普段の時間が美しいと感じる。しかしあまりに日常になってしまっているからか、それとも他の業務や生活の中で疲弊してしまうからか関係者の方と話をしているとこれらのことに話が及ばない。この美しさや愛おしさをもう一度この学園に関係している人達にどうやって感じてもらうことが出来るだろうかということが今回の作品の出発点になっている。

日常を記録すること、今送っている生活を別の角度から見ること、日常の中にある特別な時間を意識することの三つを記録したいと考えてそれぞれのグループに割り当てた。一番年長のグループは一人のベテランの先生に焦点を当てこの生活がどのように送られているのか別の角度から見るように。年齢が真ん中のグループはある種の平均的なこの学園の一日をどうやって過ごしているかを。一番年少のグループでは先生が発想したある行事を記録した。これらの記録をそれぞれ見るとそれぞれのテーマを感じながら見ることが出来るだろうし三つを連続して見るとそれぞれが相互に関係しながら多層なこの学園の毎日の美しさが見えてくるのではないかと思っている。

柏木陽

今後の展望

前年度は、先生たちが子どもの成長の様子を寸劇で表現し、修了式で披露しました。子どもたちの反応もとてもポジティブでよかったのですが、「演じる」ということに先生たちが身構えてしまう様子も見られ、彼らの中でそこで行ったことはイベントの一部として日常と切り離されてしまったように思います。アーティストが日常に入ることで起こることを、現場が自分事として咀嚼してもらうことを目的としている点を、より突き詰めた結果が、今年度の映像制作につながっています。

今年度の 3 つの映像は学年毎にテーマを据えたものですが、「根洗学園の一日（年中）「特別な一日」（年少）、「ひとりの先生」（年長）として捉えるとバランスがとれており、シリーズ物としての広がりも見えてきます。さらに子どもたち中心ではなく、先生の子どもへのアプローチに焦点を絞って編集されているため、常に動いている中で行われるため見えにくい療育の技が見え隠れしています。見学に来られた方やインターン生、新しい先生、職員研修などで、わかりやすく療育のアプローチを伝えることができます。

プライバシーの問題があるため、現状では内部向けとして制作した映像ですが、普段外部の目に触れず、なかなか理解を得るのも難しい（専門性があると思われにくい）仕事をしている現場職員の仕事に対する誇りを取り戻してくれる効果があるように思います。この取り組みは療育の専門性を浮きぼりにし、業界の自負を底上げするように広く提示できるものになる可能性を含んでいます。

次年度も、ひきつづきアーティスト・イン・レジデンスを行い、新たなテーマ設定でバリエーションを増やしていきたいと考えています。

ワークショップ

〈一般向け〉

ねあらいがくえんの ワークショップシリーズ

～やったことないをやってみる２～

ねらい

福祉現場や子どもたちとの関わりの中では、コミュニケーションがとても重要な役割を持ちます。コミュニケーションの幅広さを体感するワークショップを、福祉関係者や一般に対して実施。コミュニケーションを軸として芸術と福祉の接点を感じてもらう場を設け、今後の活動の広がりをつくろうと試みました。

また普段は限られた人たちしか出入りしない福祉施設を開くことで、社会資源としての価値を広げる可能性を探る意図も持っていました。

スケジュール

- **10**月**12**日、**19**日　19:00～21:00　・・・・「シアターゲーム」
- **11**月 **2**日、**9**日　19:00～21:00　・・・・・・「呼吸と“自然な身体”」
- **12**月 **7**日、**14**日　19:00～21:00　・・・・・「音のコミュニケーション」
- **1**月 **19**日　10:00～12:00、13:00～15:00　・・・「暮らしの中の『役割』と『つながり』」

感想・気付き

参加者の多様さによって増幅する おもしろさ

今回は子ども・障害がある・はるばる遠くから来た人・福祉関係者（職員と利用者）・母親に誘われてきた子どもなど、参加者の多様さによって起こる面白さを感じるワークショップとなりました。

子どもの無邪気で自由な立ち居振る舞い。障害がある人の動きと設定された課題に対して彼らがセレクトする行動に、「そう来るのか」の驚きとともに納得があった。それに釣られて大人も次第に解放されていく。同じ場にいることで、影響しあうおもしろさ。いろいろな人がいるからこその戸惑い、驚き、頭や心がぐるぐる動く感覚を味わう場となりました。そして、これだけ多様な参加者をだれ一人置いてきぼりにしないアーティストたちのすごさにも気づかされた。すごい！！

今後の展望

福祉現場職員の研修と、利用者と職員と一般の人たちがフラットな関係性で交わる場の提供という二つの目的を同居させた企画として、次年度から法人内の入所施設や高齢者施設等と共同で実施する計画を進めています。

プログラム紹介

シアターゲーム

参加者の様子に合わせて臨機応変に柏木さんが設定するお題にペアやグループで応えていくワーク中心でした。小学生から定年退職者、近くの入所施設住民の障がいのある方々と職員、市役所職員など、多様な顔触れの参加者がそれぞれに楽しみ、気づきを得る機会が提供されました。

柏木 陽　かしわぎ・あきら ／ 演劇百貨店代表、演劇家

劇作家・演出家の如月小春とともに活動し、アジア女性演劇会議事務局、兵庫県立こどもの館の野外移動劇ワークショップなど新たな演劇の可能性を探る現場に関わる。03年、特定非営利活動法人演劇百貨店を設立し、代表理事に就任。現在もワークショップの進行役として、全国各地の劇場・児童館・美術館・学校で、子どもたちと独自の演劇空間を作り出している。
青山学院女子短期大学、大月短期大学、和光大学で非常勤講師を務める。
平成 29 年度「演劇教育賞」(日本演劇教育連盟) を受賞。

プログラム紹介

呼吸と“自然な身体”

ひとりで自分の身体の動きや変化を感じるゆっくりした時間と、ペアで楽しみながら身体を動かす時間の両方を味わいました。一連の時間を共有することで関係性ができた最後は、理性を開放するかのように、ペアが肉食動物と草食動物になっての全力追いかけっこで幕を閉じました。

砂連尾 理　じゃれお・おさむ ／ 振付家、ダンサー

91年、寺田みさことダンスユニットを結成。02年、「TOYOTA CHOREOGRAPHY AWARD 2002」にて、「次代を担う振付家賞」（グランプリ）、「オーディエンス賞」をW受賞。近年はソロ活動を中心に、ドイツの障がい者劇団ティクバとの「Thikwa+Junkan Project」、京都・舞鶴の高齢者との「とつとつダンス」、宮城・閖上（ゆりあげ）の避難所生活者への取材が契機となった「猿とモルターレ」等を発表。著書に「老人ホームで生まれた〈とつとつダンス〉―ダンスのような、介護のような―」（晶文社）。
立教大学　現代心理学部・映像身体学科　特任教授

プログラム紹介

音のコミュニケーション

ハンガーと糸の組み合わせで出るきれいな音を聞いたり、ピアノの連弾をしたり、ワーク中心の進行ながら、合間に片岡流の音楽理論を聞いて「へー」「ほー」と唸るなるほど体験の絡んだ内容でした。

片岡祐介　かたおか・ゆうすけ ／ 音楽家

子どもの頃から作曲や即興演奏に興味を持ち、木琴やピアノの演奏を自己流で始め、東京音楽大学で打楽器を学ぶ。映画やコマーシャル音楽での経験を積んだ後、97年から2000年まで、岐阜県音楽療法研究所にて研究員として勤務し、障害児者との演奏共演を多数行う。マリンバのソロコンサートなど、ジャンルに拘らない演奏活動の他、音楽療法士のための実践的な講座や、幼児から高齢者まで幅広い人を対象に即興演奏のワークショップも行っている。おとぼけキャラで、おどり好き。

プログラム紹介

暮らしのなかの“役割と”“つながり”

１回目は、事例を交えて役割やつながりが人の暮らしにどれだけ密着しているかを聞く座学。２回目は一転してワーク中心で、見えないボールでキャッチボールや、空き缶の積み上げにみんなで助言する、３人の話を同時に聞く、チームでA4 のコピー用紙を高く積み上げるなど、多種多様なコミュニケーションの形を体験した。

川口淳一　かわぐち・じゅんいち ／ 作業療法士、結城病院リハビリテーション部作業療法科科長

長崎大学医療技術短期大学卒。長崎市内の病院に勤務後、介護老人保健施設ふらの（北海道）へ赴任。副施設長として勤務する。2008年より結城病院（茨城県）に赴任し、急性期から地域リハビリテーションまでの作業療法に従事。
学生時代より演劇を用いた学習障害児のコミュニケーション活動やワークショップ、高齢者施設での演劇裏方活動など実施。
著書に、「演劇リハビリテーションの模索」（ダブルフェイス2000）、「リハビリテーションの不思議 ～聴こえてくる高齢者のこえ～」（青海社 2006）がある。

〈親子向け〉

親子で楽しむ音楽講座

スケジュール

- **8月26日**
  「自宅でできる音あそび」
- **9月9日**
  「ピアノであそぼう」
- **9月23日**
  「デタラメ大合奏の日」

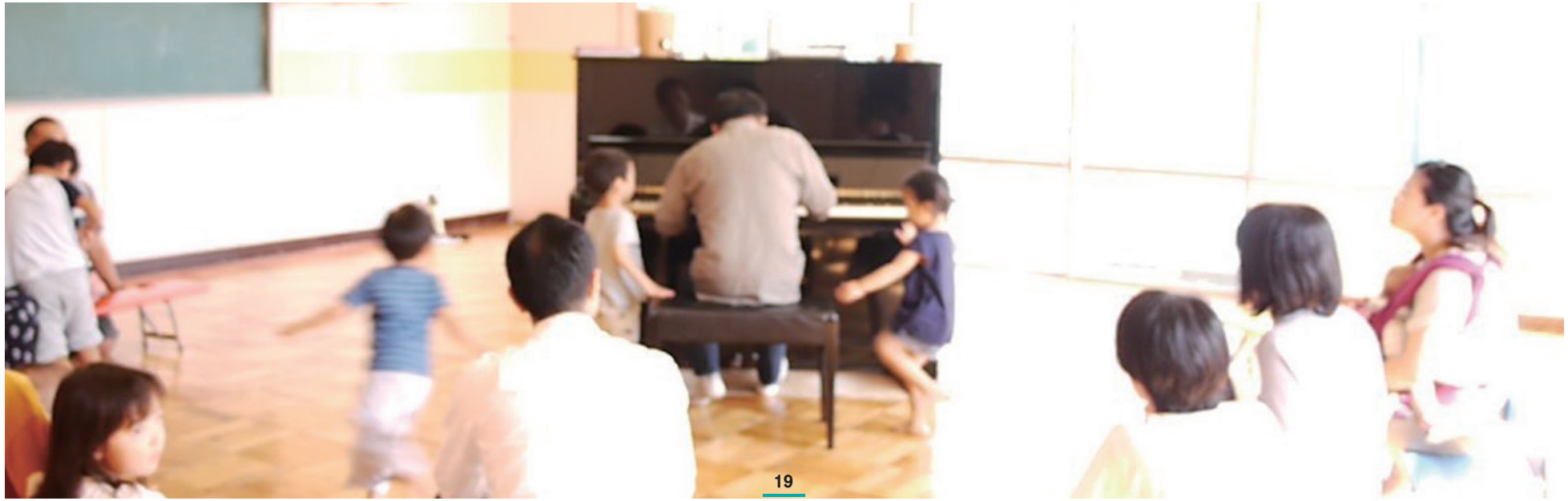
感想・気付き

親子いっしょに感覚を総動員して見て、感じて、考える

親子で遊ぶ·親子で楽しむ·親子で発見するなど、親子が日常とは違う環境をともにするシリーズの 2 年目でした。今回はレクチャーと実践と解説が入り混じった進行となりました。

これまでのワークショップから、体験を通じて自分で探るおもしろさも知っていますが、「あ～そうだったのか」という理解をえながら進むことが、親子には合っている気もします。

子どもは講師とともに自由で天真爛漫に音と遊びます。親はそれを見て面白がったり、意味を探ったりしながら、子どもの別の面を発見しているようでした。そうした親子のやりとりに加え、参加者同士のやりとりも日常にはないものであり、そのような環境からはより違った側面からわが子を発見できたりします。そんな体験をいろいろしてほしいと感じる部分も多く、今後の親子へのアプローチにワークショップを活用していく確信がもてる機会でした。



〈母親向け〉

子育て中のお母さん向け ワークショップ

～ゆるゆるしてみる～

スケジュール

- **9月20日**
  「音であそぶ、音を味わう」
- **10月5日**
  「パンクに踊る」
- **11月15日**
  「こみゅにけーしょんって何？」

実施風景

感想・気付き

母たちよ、自分を楽しもう！！

「自分一人が楽しんではいけない」に、母たちがどこか囚われている様子を感じたことを発端として始まりました。初めてのことへの参加には勇気がいります。ダンス、音楽、演劇はさらにハードルが上がりそうですが、そこを越えた参加者と実施しました。

ワークショップを通して、母たちが自分のための時間を持つことへのためらい、自分を出す（表現する）恥ずかしさとの葛藤、顔見知りのいない場に来た戸惑いなど、見て取れました。

母という役を思いっきり振り払っていい、振り切っていい場がもっとあってよいと感じさせられました。

今後の展望

アーティストとの出会いが自分を解放していく機会となっている。ためらいから、勇気を持って一歩踏み出すことで、新しい、これまでなかったものに出会う機会を提供し続けたい。
母という鎧を脱ぎ、一人のヒトとして「やったことないをやってみる」場が、子育て中の母親たちの居場所としても提供できていくのではないかと考えています。

父親参観会　実施内容・感想・気付き

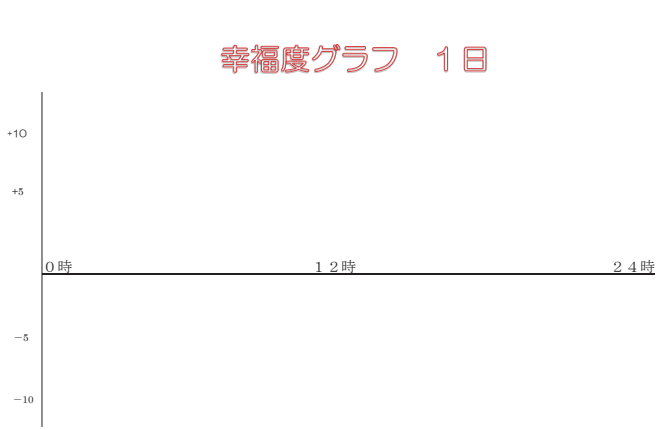
またひとつのツールが生まれた。

職員を対象として、これまでの父親参観会をふりかえるワークショップの中から生まれた「幸福度グラフ」を、実際に父たちと実践検証しました。

１日や１週間を追いながら幸福度をグラフ化する。その時々の行動と照らし合わせることで、グラフの上下の中にある心の動きが見えてくるようでした。50 人の父たちが自分のグラフと人のグラフを見比べて自然と語り出します。母たちと比べるとおしゃべりの少ない父たちですが、グラフを指させばそこに語りが始まり、笑いや共感や納得が起こっていました。女性職員も簡単にその交流の中に入り込むことができ、緊張感なく流暢に会話が続けられ、語りが止まらないおもしろさがありました。

同じ世代の子を育てているというだけで、一括りにしていたことのおかしさに自然と気づいたり、似ているようでみんな違うという一見あたりまえのことに、あらためてハッとしたりしているようでした。

日常の小さな物事の中に幸福を感じている自分を発見し、語り→考え→語るのサイクルが動き出している印象を持ちました。家族の関係性を見つめ、自発的に自分の役割を探るツールが、ワークショップからまた一つ生まれました。



OBENTOGAYOSHI HAKO
おべんとう画用紙
箱
HA KO
レンタル
おべんとう画用紙
専用の展示キット
「おべんとう画用紙箱」
レンタル開始！
どこでも！たのしく！
2018年11月
レンタル申込
受付開始！

おべんとう画用紙箱

ねらい

親子のコミュニケーションツールとしての「おべんとう画用紙」の普及を目的として、
見る楽しみを付加した実施を促進するための専用展示キットを作成する。

おべんとう画用紙箱の紹介

「おべんとう画用紙」専用の展示キット
「おべんとう画用紙 箱」を使って展示すると、見る楽しみが演出でき、
場所に合わせて展示空間をつくることができます。

デザイン：YU MATSUDA DESIGN　　http://www.yumatsuda.com

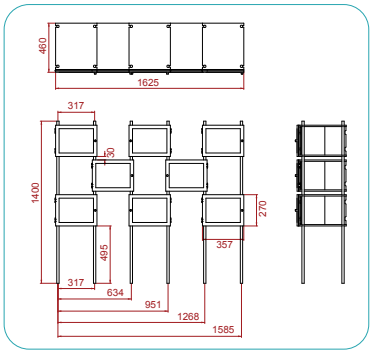
箱も自由に組み合わせられます！

縦に積む

交互に組み合わせる

開閉式の箱で見る楽しみ！

表には子どもの描いたおべんとう画用紙を貼り、開くと実際に作ったお弁当の写真、扉の内側にコメントを貼る仕組み。開く時のワクワクが加わり、大人も子供も見る楽しみが広がります。



製品仕様

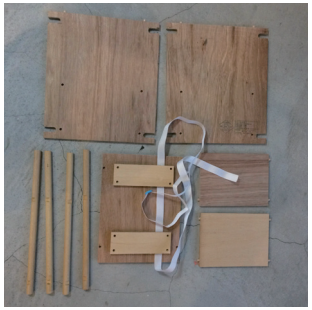
製品名称：おべんとう画用紙専用
木製組み立て式展示キット
「おべんとう画用紙 箱」

箱のサイズ：270×357×424（mm）

箱の数：最大 30 個

組み立て方

セット



step.1

step.2

step.3

step.4

step.5

1個分の箱セットパーツ：開閉式板1枚（紐ベルト付き）、天板1枚、地板1枚、側面板（小）2枚、丸棒4本

レンタルの流れ

「おべんとう画用紙」専用展示キット

HOW TO

おべんとう画用紙 箱 レンタルの流れ

1. おべんとう画用紙サイト http://obento-gayoshi.com へアクセス
2. レンタル申込書、概要書をダウンロード
3. レンタル申込書を記入して FAX（または、メール）
4. レンタル期間の確定
5. 契約、機材受け取り※
6. 展覧会開催
7. 機材の返送※

※往復の郵送費はご負担ください。ご自身で移動させていただくこともできます。

総括

AiR

アーティスト・イン・レジデンス

レジデンスでは関係性の違いが、停滞している環境を変えることに大きく影響しました。「常によくなっていくこと」を現場は考えています。しかし、動けなくさせてしまっている思い込みの常識や、積み重ねてきたルーティーンなどがレジデンスによってを払拭されるところがあり、それは療育や子ども、そして支援者としての自分を捉え直すことにつながってきました。今回は映像も加わり、捉え直したものが「いまの絵」（映像）として切り取られています。今後、映像を見ることが「今」を考えることとなり、さらに発展させていく時の出発点としての役割を果たしてくれることにつなげていきたいと思っています。

OBENTOGAYOSHI HAKO

おべんとう画用紙と展示キット

おべんとう画用紙が親と子のコミュニケーションツールとなり、展示キットは鑑賞者の交流と語り合いを生む役割を持ちます。展示キットは、展示場所がなくても身近なところでの展示を可能にし、作品をワクワク感を持って楽しく味わえるものにさせます。おべんとう画用紙の役割を相乗的にふくらめるものになったと思います。今後もそのような分かち合いの拡大に取り組んでいきたい。

Workshop

ワークショップ

今年度はワークショップのシリーズ化・母親対象のワーク・親子対象のワークとこれまで続けてきたワークショップを、対象を明確化させて展開する活動となった。

様々な人が参加し混ざり合うワークショップは、多様性やいろいろな関係性と出会う場としての役割があると感じています。「人は偶発的な出来事に惑わされるからこそ人である」とどこかで聞いたことがありますが、「“やったことない”をやってみる」をテーマにしたこのワークショップシリーズには、惑わされた先に展開を生み出す力を育む効果があるのではないかと考えています。

子育ての時期の親にとって、わが子や自分について気づき・考え・発見するのは、親子が同じように様々な感覚を総動員する場の中にいるからこそできることだと思います。正解のない子育てだからこそ大量の情報に振り回されるのではなく、自分の感覚を総動員し見て、感じて、考える中から、「（子育ての方向性として）これを大事にすればいいんだ」につながってほしいと願っています。親自身も多様な役を自由に行き来できるよう継続して取り組んでいくつもりです。

幸福度グラフのように、思ってもいないものがワークショップをおこなう中から生まれています。

アーティストとのやり取りの中で生まれるものの愉快っぷりをおもしろがり、誕生してくるものを試し楽しむ。その積み重ねから見えてくるものを丁寧につかむ。こうしたサイクルが現場には必要で、そのサイクルの体験が気軽におこなえる点でもワークショップは有効だと感じました。

主 催

浜松市根洗学園

（社会福祉法人ひかりの園）

住 所

〒433-8108

静岡県浜松市北区根洗町 667-1

電 話

053-436-9318

メールアドレス

nearai@ruby.ocn.ne.jp

共 催

静岡県文化プログラム推進委員会

http://shizuoka-ac.org

2018 SHIZUOKA

静岡県文化プログラム

2020 年オリンピック · パラリンピック東京大会に向け、オリンピック憲章で開催が定められた「文化プログラム」が、日本全国で展開されます。静岡県文化プログラム推進委員会は、文化 · 芸術振興や文化 · 芸術による地域 · 社会課題対応を目指して、様々な団体等との協働による取組を進めています。

柏木 陽

アーティスト・イン・レジデンス

＠根洗学園 2018年報告書

渡辺 涼子

2018年　柏木陽　アーティスト・イン・レジデンス　@根洗学園

全体の流れ

2018年

- 7月5日※・・・ 関係者ミーティング
- 8月21日・・・ 関係者ミーティング
- 10月12日※・・・ 柏木さん　園での活動参加　**きい**（つき）
- 11月14日※／15日・・・ 柏木さん　園での活動参加　**きい**（ほし）
- 12月25日※／26日※／27日※・・・ 柏木さん　園での活動参加　**もも**（チューリップ）・**きい**（そら）・**みどり**（ぱんだ）

2019年

- 1月8日　全体ミーティング※・・・ 関係者ミーティング
- 1月17日／18日※・・・ 樋口さん　撮影　**きい**　，　柏木さん　園での活動参加　**もも**（チューリップ）
- 1月30日・・・柏木さん　園での活動参加　**きい**
- 2月8日・・・柏木さん　園での活動参加　**もも**　，　樋口さん撮影　**みどり**　，　関係者ミーティング
- 2月12日※・・・樋口さん　撮影　**みどり**
- 2月14日※／15日※・・・ 柏木さん　園での活動参加　**らいおん**（くま）
- 2月21日／22日※・・・ お別れ会実施　，　柏木さん　園での活動参加　**もも**　，　樋口さん撮影　**もも**
- 3月7日・・・保育士インタビュー
- 3月20日・・・映像鑑賞〈職員対象〉
- 3月27日・・・映像鑑賞会〈親子対象〉

※印は渡辺が参加・観察した回　／　（）内は教室名　／　**もも**…年少グループ、**きい**…年中グループ、**みどり**…年長グループ、**らいおん**…併行通園

登場人物

柏木さん … 柏木陽
（演劇家、演劇百貨店代表）

園 長 … 松本知子
（浜松市根洗学園 園長）

野島先生 … 浜松市根洗学園職員

菊池先生 … 浜松市根洗学園職員

樋口さん … 樋口勇輝（映像作家）

鈴木さん … 鈴木一郎太
（静岡県文化プログラム・
コーディネーター）

渡 辺 … 渡辺涼子（リサーチャー）

1 関係者ミーティング：保育を省察する道具としての演劇やアーティストの可能性

アーティスト·イン·レジデンスとしての活動を本格的に開始する以前の７月５日と８月21日、学園では関係者（柏木さん·園長先生·野島先生·鈴木さん）によるミーティングが行われた。

わたしが参加した５日のミーティングでは、はじめに昨年の活動の反省を踏まえた上での、今回のアーティスト·イン·レジデンスの目的と対象について検討がなされたが、参加者間では「アーティストが現場に参入することで、学園の実践の何が変わるのか？」という問いが、議論の主な焦点であったように感じられた。

昨年のワークショップで柏木さんは、現場の保育士の先生たちと園の子どもたちの日頃の様子を再現した演劇づくりを行い、参加者間からも概ね好評であったが、今回は前回よりも活動期間が長期にわたることもあり、改めてアーティストの参入の意味を問いつつ、活動の目的を検討しようとする姿勢がみられた。

そのため具体的なプランとしては、活動の前半では柏木さんがインターンとして現場に入りフィールドワークを行いながら現場内の問題を探索·発見し、後半で浮かび上がった問題に対して何らかのアプローチを行なっていく、という仮定でアーティスト·イン·レジデンスは構成されていた。

「アーティストが現場に参入することで、学園の実践の何が変わるのか？」という問いについては、ミーティング内で参加者から様々な意見が寄せられた。たとえば、「遊びを含めた現場の力を強化したい」という園長先生のリクエストからは、遊びという子どもにとって想像（創造）的·能動的な活動を、アーティストの援助を得ながら園に意図的に導入するといった目的意識が感じられた。

他にも昨年の課題であった「劇づくりを通して、保育士の身体的な関わりを他の保育士たちと共有する」といったコミュニケーションの道具としての演劇に注目した意見や、「日常的な実践を意識化し、他者と共有するために演劇を用いる」というアイデアが柏木さんから提案された。いずれも、アーティストの参入が意味をもつために、演劇やアーティストを保育現場でどのように採用するかに関わるコメントであったが、それは同時に「そもそも現場では何が問題で、それをどのように改善したいか」という問いと表裏一体でもあった。

すなわち、今回のアーティスト·イン·レジデンスでは、たとえば参加者たちと楽しく演劇を作るというような、単にアーティストが目新しい状況を導入したり専門の技を紹介するために園に入るというより、現場で保育士の先生たちが日常的に行っている実践を振り返り、可能な範囲で実践に何かしらの変化を生み出す機会を設けることが、大きな目標として設定されていた。すると、この目的はアーティストである柏木さんのもたらすどのような活動や関わりによって可能になるのだろうか？これから半年以上の時間をかけて行われるアーティスト·イン·レジデンスの可能性と、柏木さんが学園でのフィールドワークを通してどのような問題を発見し、問題の解決や変化に向けてはたらきかけてゆくのか、期待と楽しみが膨らんだ初回のミーティングであった。

2 10月～12月
「部外者」としてのフィールドワーク：問題の発見から、かけがえのない日常の記録へ

いよいよ始まったアーティスト・イン・レジデンス。前述したように、10月から12月は活動の前半部として，柏木さんが学園の各クラスに入りながら現場の問題を探索し確認する作業を中心に展開された。毎回、柏木さんは、朝のミーティングを含む始業（8時半）から、夕方の業務の申し送り等を含む終業（17時）まで、インターンとして他の保育士の先生たちと同じように園の活動に参加した。わたしは、その活動を部分的に観察したり、活動終了後に柏木さんたちへの簡単なインタビューを行ったが、当初、柏木さんは現場の様々な問題に出会う中で、これらの問題にどのような立場からどのようにアプローチすべきかをいろいろと模索していたように感じられた。

たとえば10月12日のインタビューでは、保育士の先生たちから聞いた話として、柏木さんは「遊びに夢中で遊びを終わらせることができない子」にどのように「終わらせ方」を提供できるかという問題と、「遊びに夢中になれない、遊びのバリエーションが限られている子」の遊びをどのように豊かにできるか、という2つの問題に触れつつ、「僕が（問題を）発見してもしょうがないんですよね。ぼくは部外者だから」と述べている。「部外者が入ることで見えてくることが大事で、見えてきたから、じゃこうできるんじゃないとか、ああしてみようかとかいける方がいいんですけど。うーん…（中略）…その僕がやれることってなんだ

ろうな、っていうのはずっと考えてるところなんですけど」、「まあ、僕も模索してるところなので、何ができるのかなあって思っているんですけど。でもなんか、うーん，難しいですね」といった語りがあり、そこから園の活動への参加を通していくつかの問題の発見は可能であっても、「部外者」というアーティストとしての立場から、それらの問題をどのように保育士の先生方と共有したり解決するか、については迷いが生じているように見受けられた。

その一方で、園へのアプローチについて柏木さんはいくつかのアイデアを挙げてもいた。「普段の療育がすこし楽になるとか、ちょっと面白くなるとか、そういうことが最終的に起こればいいと思ってます」、「だからちょっと思ったのは、いろんな手を考えて、いろいろやってみて、この手は先生たちにもだからそうやって『こんな手を考えたので、実践してもらえます？』って、この手はなんだろ、『こう、成功率 20%くらいです。だけどはまれば、はまった子にはわりと毎回いけます』みたいなものもあれば、『この手は成功率 8 割です。だけど一回しか使えないです』みたいな。なんかそう、いろいろ出てくればそれでいい気がしたんで。なんかそういうのをいっぱいみんなで持って、作って…（中略）…そういうのが、先生方の中にちょっとできてきて、まあちょっと面白いわね、っていう感じになってくれればいいかなって思ってますけどね」と、療育における、問題に対して一つの「正しいやり方」や「正解」をアーティスト側が提示するというより、先生方と共に関わりのレパートリーを増やしていくような問題解決のイメージを語っていた。言い換えれば、アーティストはあくまで保育士の先生の側に寄り添いながら、問題と解決策を発掘し提案するという立場である。

続く 11 月 14 日と 15 日にも、柏木さんは別の学年のクラスにインターンとして入ったが、14 日午前中の年長クラスでの「おさんぽ」活動が，柏木さんの当時の立ち位置を知る上で大変印象的であった。

おさんぽでは近くの公園まで、保育士が子どもたちの手を繋いで一列になり歩いて移動するが、柏木さんも他の先生たちと同様に、2、3 人の子どもたちの移動を任されていた。しかし移動の道中、子どもたちが大人しく歩くことは少なく、自分たちの関心に応じて、始終立ち止まったりよそ見したり、つないでいた手を瞬間的に離してしまったり、せわしなく動き回ってしまう。そのため先生方には細心の注意が求められるのだが、柏木さんも子どもたちの一挙一動に常に目を配っては始終「危ないよー！」、「はい、ここでストップ！」等と声をかけており、その姿は他の先生方の姿や関わりにも類似する極めて「療育の先生らしい」ものであった。

外出中という気の抜けない状況とはいえ、それまで「部外者」というイメージの強かった柏木さんが、園への参入まもなくして他の先生方と同じように見える振る舞いを身につけ、子どもたちの安全に気を配り続ける様子から、柏木さんが既に保育者の立場にいることと、そのような大人の立ち位置を可能にする場の持つ力を感じさせられた。

そんな柏木さんに対する子どもたちの反応も様々であり、柏木さんの言葉に笑顔で応じながら手をつないで移動する子もいれば、あたかも柏木さんを試すようにチャンスを伺っては手を離そうとする子、声かけしても決して進もうとしない子など、それぞれに柏木さんからの反応を求めつつも個性を発揮していた。特に、

公園から園に戻る際にいくら声をかけても手を繋いで帰らず、あちこち歩き回ろうとする子と、一定の距離を取りつつ粘り強く声かけを試み続ける柏木さんとの様子は印象に残るものであり、公園にもっと滞在して自由に動き回りたい意思を貫く子どもと、その意思を尊重しつつも「先生」として期待される誘導を行わざるを得ない柏木さんとの間には、緊張と試行錯誤が発生していた。こうした子どもとの一対一の柏木さんの粘り強い関わりは、公園から園に帰ってからも靴を履き替えず部屋に入ろうとしない子に声かけする場面（冒頭の写真参照）など、その後もあちこちで見られ、「療育の先生らしさ」をさらに感じさせるものであった。

このような子どもたちとのやりとりに対して、柏木さんは活動終了後のインタビューで「（昨年の園活動への参加との違いとして）今回は生活の支援が中心なので、正直どこまで関わったらよいか、ここまでやっちゃって（関わって）もいいのかな、と迷うところはあります」と述べている。柏木さんにとって保育士の先生として入ることは初めての経験であり、自身の専門性をどう生かすかについては「うーん、わからないですね。（園生活や子ども達について）知らないことが多いので」と、自らの専門性はあくまでかっこに入れた状態で場に参加していた。また、この日に発見した問題として、クラスの先生たちが母親との関係に非常に気を遣っていたエピソードを挙げており、「先生方の気持ちがもう少し楽になって、（お母さんたちと）つきあえるといいのかな」と、先生と母親の関係を円滑にするためのアイデアを主に考えていたことから、10 月 12 日の時と同様に、現場の先生方が具体的に語る「困り感」から、問題を発見するアプローチを続けている様子が伺えた。

続いて 12 月に入ると、柏木さんが未体験のクラスを中心に三日間のフィールドワークが行われた。25 日は年小クラスの食育イベント（ポップコーン作り）、26 日は年長クラスの公園へのお散歩、27 日は年中クラスの室内運動・外遊びなどが主な活動として実施され、柏木さんが子どもたちと共に楽しみながら参加する姿がそれぞれのクラスで観察された。（以下、写真参照）

柏木さんによる各クラスの感想としては、年少クラスでは「(子どもたちは) 手がかかるけれど、以前より疲れなかったですね」と、先生としての役割に慣れてきたコメントが見受けられた。以前は、要求を明確に述べることが難しい幼い子どもたちの発言に引っ張られることも多かったが、慣れてきたことで今回は園でやるべきことにフォーカスできた、という。同時にこのインタビューでは、12月に生まれたアーティスト・イン・レジデンスの新たな目標として、「学園の日常的な活動を映像化すること」についても柏木さんから語られた。7月5日のミーティング時など当初から、「(先生たちの) 日常的な保育実践を意識化する」という目的が提案されていたが、実践を意識化し振り返るための「教材」として、「プロのアーティストによる学園の映像資料の作成」というアイデアが、柏木さんと鈴木さんの話し合い等から生まれたという。そこでの柏木さんの役割は、「子どもたちや先生が一緒に楽しめたり、やりたいこと」を企画しながら、映像をプロデュースすることにあり、ここで最初に設定されていたアーティストによる「現場内の問題の探索と発見」という課題が,「子どもたちとのかけがえのない日常の発掘と記録」というテーマへと大きく変化したことが感じられた。この変化によって、本プロジェクトの活動がより具体的に動き出すと同時に、アーティストによる問題発見および解決という形から、アーティストが発見した保育実践の共有へと目的が移行したと考えられる。

他にも年長クラスに入った感想として、園の活動を遂行する上で子どもたちは「強敵ぞろい」であり「先生たちがフルで力を発揮している」ため、予め先生によって決められた活動よりも「見通しのないもの」を敢えて子どもたちに対して行ってみたい、という意見が寄せられた。「見通しのないもの」の例としては遊びがあり、先生と子どもたちが一緒に楽しめる遊びを見つけたい、という。また翌日の年中クラスでの振り返り時には、「(年中にはまとまりという意味での) クラス感があり、遊びが全く違う」と語ったように、お絵かきや身体を使った押し合い、おもちゃを用いた集団遊びが、子どもたち同士や柏木さんを媒介としてクラス内で活発に繰り広げられていた。いずれのクラスの場合も、10月・11月にみられた先生たちの会話を通して明らかになった問題点の指摘よりも、子どもたちとの遊びや遊び方について柏木さんから多くの言及が寄せられており、ここからもアーティストの関心が「子どもたちとの楽しい日常の発掘と記録」に移ったことが示唆された。

3 1月～2月
教材としての映像資料制作：
アーティストたちによる環境のアレンジメント

年明けまもない１月８日、園では夕方からアーティスト・イン・レジデンスの今後の方針について説明と検討を行う全体ミーティングが実施され、保育士の先生たちの多くがそこに集合した。ミーティング冒頭では、柏木さんと鈴木さんから改めて今回のプロジェクトの目的と内容について先生たちに向けた説明が行われた。鈴木さんからはプロジェクトの目的として「まだ見ぬ後輩たちに、ここの現場が持っている技術が何かっていうのを伝えるために、柏木さんが考えたことが使えるんじゃないかなって。だからなんとなく教材っぽいものが残せるんじゃないかと」と、先生たちの技を将来の学園の先生（後輩）たちに伝えるために教材としての映像資料をつくること、そのために１月から映像作家の樋口さんが撮影担当で加わるという話があった。続いて、柏木さんからも今回の趣旨説明として、「(10月から園に入って先生方と）一緒にやらせてもらって『(自分は）いらねえじゃん』って思った」こと、一方で「(園の）環境をどんなふうに使っていけるといいのか」と考えたときに、「先生方にとって、楽しかったり誇らしかったりする時間を、他の人に届けられるような活動ができるといいな」という気持ちが湧き、とりわけ「先生たちがこともなげにやっている」”すごいこと”を映像として残す、というアイデアが浮かんだことが語られた。

ここで作成する映像は３つのグループ毎に３種類が想定されており、みどりグループではキャリアの長い保育士である菊池先生と子どもたちのやりとりを中心

的に追うこと、ももグループでは一年間の記念イベントとなる２月 22 日のお別れ会（遠足とパーティ）の１日を撮ること、きいグループでは朝の会など親がなかなか見ることができない１日の日常生活をダイジェストとしてまとめることが柏木さんにより提案され、これらの案に対して先生たちから意見や質問を募集した。

二人の話を聴いた先生たちは、始め質問も少なく静かにしていた様子であったが、グループ毎のディスカッションでは活発な議論が発生した。最終的に、みどりグループの菊池先生から「単に面白おかしいというのではなく、療育的スキルの現れに焦点を当てて欲しい」こと、ももグループからは映像について親への了承を得る必要があることとお別れ会の進行について検討していること、きいグループからは「お母さんが信じられない世界」として食事場面を特に見てほしい、という希望が出された。

柏木さんは、特にきいグループの意見を受けて、「(園では）できたとかできるようになったとかいうのがフォーカスされやすいとおもうんですけど、それだけに収束されない豊かさがこの園にはあるとおもっているので、できたできないだけに回収されない何か」を撮影したいこと、それは園で先生たちが既に行っている「できないことの中に何かを見つけていく」ことも含んでおり、そのために今後の準備を進めていくことを強調した。これは、柏木さんがフィールドワーク当初から述べていた、一つの「正しいやり方」や「正解」にこだわらない、多様な保育実践のあり方を重視する姿勢と、映像にもその方針を反映させるという希望を示すものであった。

３つのグループからの意見が出揃ったところで、柏木さんのまとめの言葉と共に一時間ほどの全体ミーティングは終了したが、その後も柏木さん、鈴木さん、樋口さんによる関係者ミーティングが行われ、柏木さんからは３クラスの撮影イメージとして「樋口さんから見て、菊池先生が不思議な対応をしたところ（みどりグループ)」､「幸せな３歳時代のプロモーションビデオ（ももグループ)」､「ドキュメンタリー形式での撮影（きいグループ)」等のアイデアが樋口さんに提示された。一方、これまで即興的なアート活動の撮影を中心としてきた樋口さんにとっては、8 日のわたしのインタビューで、園の様子や映像の方向性について「まだ全然わからないですね…」と語っていることからも､療育場面の撮影は未体験の挑戦だったようである。

１月から２月にかけて、柏木さんと樋口さんは二人合わせて 10 日間程度かけながら園の活動への参加と撮影を実施した。柏木さんはこれまでと同じように「先生」として、今まで入ったことがないグループも含めたクラスに参入しながら、撮影対象の選定や先生方のニーズの把握に努め、樋口さんは柏木さんのコメントを参考に独自の視点から撮影を行なった。

わたしが観察したのはそのうち５日間ほどであったが、柏木さんはその頃には園の１日にもだいぶ慣れた様子で一人一人の子どもたちと密接に関わっており、遊びを即興の演劇風にアレンジするなど、自身の専門性をより生かした活動を導入していた様子であった。

たとえば年少クラスでは子どもが箱に入って遊んでいると、柏木さんが箱を丁寧にラッピングする仕草の後で「配達でーす」と他の先生の所へ子どもの入った箱を運ぶ。「配達人ごっこ」へと遊びが変わり、届け先である先生も「デリバリーが来た！」と喜んで箱を受け取ったり、箱の中の子どもが「あーんあーん！」と赤ちゃんのように泣くふりをしてみせる、という遊びの展開が発生していた。
（1月18日、右写真参照）

また別の年長のクラスでは、父兄参観日に「三びきのやぎのがらがらどん」を下敷きにした滑り台遊びを先生たちが計画し、子どもたちはヤギ役，柏木さんはトロル役として配役したところ、一人の男児が「４番目の早いヤギ」という原作にはない新しい役を作り出して物語の続きを加え、他の子どもたちもそのアイデアを肯定的に受け止めるという、想像（創造）遊びの展開が観察された。

他方で，樋口さんは日常的な活動の邪魔にならないように、クラスの片隅で黙々と撮影を続けることが多かったが、園では外部からの訪問者が多いこともあり、子どもたちも樋口さんの様子にすぐに慣れて日頃と同じようにのびのびと生活していた。２月８日の関係者ミーティング時に樋口さんに状況について尋ねたところ、樋口さんはきいグループの１日の様子についてはもう映像を作れると明確に述べており、撮影が順調に行われている様子が伺えた。（一方で、当日撮影されたみどりグループについては、対象となる先生と子どもたちのどの場面に注目するかについて，柏木さんとの議論が重ねられた）

こうした園の日常生活への参与に加えて、２月22日にはももグループの撮影

対象であったお別れ会が実施された。お別れ会は、親子の共同作業による。1）地元のピザ職人に学ぶピザ作り、2）近所の店での買い物、3）焼きあがったピザを中心とした昼食、4）全員で外遊びやダンス、によって主に構成され、柏木さんは担当の先生方との相談の結果、司会役兼先生として現場に参加し、樋口さんはイベントの様子を最初から最後までカメラに収め続けた。（写真参照）

ピザ作りと試食は、柏木さんのアイデアに基づいて企画されたが、子どもたちは素材に直に手で触れられるということもあり、ピザ生地を一生懸命に伸ばしたり、先生や親から配られるチーズやバジル、コーンなどを思い思いにピザ生地の上にトッピングするなど、集中して作業に取り組む様子が見られた。また親側も自分の子どもや他の子どもたちをサポートしつつ、合間合間に親同士での会話を重ねており、始終、和気あいあいとした雰囲気の中で活動が進行していた。完成したピザも大人気で、あっという間に各自のお皿に取り分けられ、子どもたちがピザを口に頬張る姿があちこちのテーブルで見られた。

後日，お別れ会の感想を柏木さんに尋ねたところ、最初に「面白かったですね」という一言があった。柏木さんによると会を計画するにあたり、親側のプレッシャーを下げることと、子連れでの買い物が難しい状況の改善などを考慮したが、結果として、お昼のピザを子どもたちが食事の時間ぎりぎりまで残さずに食べてくれたり、野外で皆で手を繋いでフォークダンスを踊ったり、会終了後も親同士が園庭に残って会話を続けるなど、参加者たちが他の家族と交流しそれぞれに楽しむ時間を設けることができ、企画者の一人として満足している様子が伺えた。

4 おわりに：療育の現場におけるアーティストとアートの役割

３月以降は、映像制作のための保育士（菊池先生）へのインタビュー、映像の編集，職員を対象とした完成映像の鑑賞会、園の修了式での親子に向けた映像公開といった活動が予定された。しかし、わたし自身の観察は２月で終了しているため、本章では映像の内容には触れずに、約半年間アーティストの活動を追いかける中で生じた問いについて改めて検討したい。

最初に､7月の関係者ミーティングでは「アーティストが現場に参入することで、学園の実践の何が変わるのか？」、また「現場では何が問題でどのように改善したいか」という問いが浮上していた。ここでは既に記したように、アーティストや演劇の導入が現場のなんらかの問題を改善するのではないか、という「問題解決モード」がアーティストが参入することの意味も含めて当初想定されており、その問題発見と解決のために柏木さんが現場でのフィールドワークを行う、という経緯があった。

一方で、保育士として現場への参加を重ねるうちに柏木さんたちが得たアイデアは、学園の日常生活やイベントを他者や実践の振り返りのための映像として記録･保存することであり､その目的は「課題（テーマ）共有型」へと変化してゆく。この大きな変更がなぜ生じたかについては、１月８日の全体ミーティングにあった「先生たちの”すごいこと”を他者に向けて記録する」という柏木さんと鈴木さんの説明以外にも、関係者ミーティングでの柏木さんの言葉が参考になるかもしれない。そこで柏木さんは、「うちの園ってすごいでしょ、うちの先生ってすごいでしょ、が、ひいては子どもたちって素敵でしょにつながる」､「アーティストが来る機会を、自分たちをほめる機会とするのが大事だと思っている。振り返った時に、そういう機会を学園は用意してきたな、と思い出してもらえることが理想かな」と語っていた。この発話からは、園や他の先生たちの実践をポジティブに評価できる姿勢が、子どもたちをポジティブに捉えるまなざしに繋がること、そして、先生たちが自身や他者の実践をポジティブに評価できる機会を設けることが、アーティストが現場に参与する意味かつ園の役割であり、その機会をつくるためのツールとして映像制作を企画したことが伝わってくる。

それでは完成した映像は、果たして保育士の先生たちや子どもたち、子どもの父兄たちにどのように受け止められ、理解されたのか？たとえば目的としたように、映像が第三者や先生たち向けの「教材」として用いられたり、そこから先生たちが何かを「学び」､園の実践や自身の保育観に影響を与えるような事態は発生するのだろうか？あるいは映像は「教材」というよりも、製作者の視点を強く反映した「アート作品」として見る者の間で鑑賞されるのだろうか？

こうした問いについては，３月下旬に行われた映像鑑賞会の様子や先生たちの感想などを精査する必要があるが、アーティストやアートの役割、今回のアーティスト･イン･レジデンスの成果を再考する上で重要な問題であると考える。同時に

園や親子の側の受け止め方や変化だけでなく、映像作品の編集や鑑賞を通して、アーティストたち自身の園や療育に対する見方に変化が生じたか、あるいは見方そのものをどのように培っていったか、についても、作品の影響を考える上で検討の余地があるだろう。

最後に、完成した映像作品が子どもたちと先生方との”すごい”瞬間を切り取り･留め･他者に伝達する、というとき、その映像をどう解釈するかについて参考となる津守（1987）の言葉を紹介したい。津守は保育の実践において、大人は子どもを対象化して行動の一部を観察しながら関わるのではなく、全感覚をはたらかせながら子どもの行為を知覚･応答し（p.134)、子どもとの生活を、大人にとっても子どもにとっても意味あるものにすることが重要である（p.119-120)、と述べている。この考えに基づけば、映像の中に描かれる療育の時間が、大人と子どもの双方にとって生き生きとした主体的で成長を伴うものになっているか、さらにその映像を見ている現在の自分自身が、目前の今の子どもとの生活をそのようなものとして経験できているか、すなわち大人と子どもの協働的で創造的な関係について過去と現在の視点から問うことができるかが、今回の映像作品を評価したり、理解する際の一つの視点になりうるのではないだろうか。

「私は、子どもと一緒に過ごす生活を、それが何に役立つのかを問わずに、その現在が子どもにとってたのしいものであってほしいと思う。そのためには、子どもと交わる保育者の現在が、明るく温かく開かれているかどうかが問われる。ときとして私は、もっと能率のよいやり方があるのではないかとの疑念にとらわれることがあるが、それは、現在まだ到達していない状態を想定し、未来の視点から現在を見る見方である。そうなると現在にあせりを生じる。保育においては、そういう考えはとらない。子どももおとなも、現在を力強く生きはじめるとき、それによって現在が変容される。その点で保育は、現在を新たに形成する行為である」（津守，1987 年，p.166）

【引用文献】
津守真，1987 年，「子どもの世界をどうみるか：行為とその意味」，NHK ブックス